

機関番号：33305

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19730443

研究課題名（和文） 摂食障害および不健康な食行動の発達に関する研究

研究課題名（英文） Outcome of individuals with eating disorders and individuals without concurrent eating disorders but suffer from eating pathology.

研究代表者

前川 浩子 (MAEKAWA HIROKO)

金沢学院大学・文学部・講師

研究者番号：1043447

研究成果の概要（和文）：本研究では主にパーソナリティおよび対人関係に焦点をあてることによって、摂食障害の女性の特徴を明らかにし、また、摂食障害ではない女子の不健康な食行動の発達のプロセスについて検討が行われた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the risk factors of eating disorders. Women with Anorexia Nervosa showed high harm avoidance and low self directedness, and they perceived the relationships with their sibling negatively. Moreover, junior high school girls who have difficulty in having a friendship showed high level of body dissatisfaction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	570,000	3,670,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：摂食障害、体重や体型へのこだわり、食行動・態度、パーソナリティ、きょうだい、仲間関係、対人関係、非共有環境

1. 研究開始当初の背景

わが国では、「食育基本法」が制定されるなど、国民の健康を考える上で「食」に関する関心が高まってきている。この背景には、われわれを取り巻く社会的、経済的環境が変化したことが食生活に影響を与え、栄養の偏り、不規則な食事、そして肥満などや生活習慣病といった問題が高まってきたという指摘がある。それと同時に、特に女性の間では、「やせていることがよい」とする価値観が高まり、過度のダイエットにより健康を害する女性が増加していることが報告されている。

体重や体型に対する態度や認知の乱れによって体重調整や食行動に異常を起こすこ

とを特徴とする精神疾患が摂食障害である（DSM-IV-TR; American Psychiatric Association, 2000; 高橋・大野・染矢, 2002）。わが国においても、摂食障害の患者が増加しているという報告がなされており（稲葉ら, 1994a; 稲葉ら, 1994b; 大関ら, 1995）、深刻な問題とされている。摂食障害は、期待される体重の85%を下回る神経性無食欲症（AN）と体重を維持している神経性大食症（BN）とにさらに分けられる。

摂食障害の危険因子については、①生物学的要因、②パーソナリティ要因、③家族の要因、④社会的要因、⑤多様なライフイベントの関連について報告されている（Gowers et

al, 2001)。生物学的要因では、遺伝的な側面や、セロトニンの機能についての報告が多く見られ、(Kendler et al, 1991; Kaye, 1998; Strober, 1995)、パーソナリティ要因では、自尊感情の低さや (Gowers et al, 2001)、完璧主義で、従順であり、強迫的で、情緒をおさえ、社会的自発性が乏しいという特徴 (Srinivasagam et al., 1995; Stober, 1980)、さらに高い不安を持っていることなどが示されている (Berg et al., 2000; Mizushima et al., 1998)。家族の要因としては、親の不適切な養育や親子関係の悪さについて多くの研究がなされている (石川ら, 1960; Lavik et al., 1991; 高橋, 1994)。また、社会的な要因として同年代の仲間によるダイエット行動による影響があげられ (Paxton et al, 1999; Taylor et al., 1998)、メディア媒体がやせ願望を促進させている要因となっていることも示されている (Field et al., 1992; Thomasen et al., 2001)。加えて、多様なライフイベントについては、虐待の経験 (Kenardy et al., 1998; Welch et al., 1996) や、体型に関してからかわれた経験 (Hill et al., 1995) と摂食障害との関連について明らかにされている。

このように摂食障害には様々な側面を持つ多くの危険因子があることが考えられ、さらにそれらの危険因子同士が複雑に絡み合って発症していることがこれまでの研究から明らかにされてきた。

2. 研究の目的

厚生労働省による平成 14 年患者調査報告によると、わが国における摂食障害患者は 4000 人を超え、昭和 59 年以降、年々増加の一途をたどっていることが明らかになった。摂食障害は生命をも脅かす深刻な精神疾患であるため、その治療、予防、介入法の構築が急務とされている。摂食障害に関する研究は、欧米を中心として数多くなされており、有用な知見も多く得られている。しかしながら、欧米の研究から得られた知見をそのままわが国の治療や、介入・予防に応用することは容易ではない。そのためには、わが国における摂食障害の現状を把握し、さらに、縦断的に研究を行うことによって、一般女子ならびに女性の不健康な食行動の発達についても追跡することが求められる。

そこで本研究では、以下の 4 つの観点から目的を設定し、研究を行うこととした。

<研究 1 : 摂食障害のある女性と対照群の女性との食行動・態度およびパーソナリティの比較>

神経性無食欲症 (AN) と対照群との女性との食行動および、ならびに、パーソナリティにどのような違いがあるのかを検討を行

い、さらに、摂食障害ではないが、高い体型不満を持つ女性が摂食障害の女性とパーソナリティに関して違いが見られるのかを検討し、体型不満の高さが不適応的になるのはどのような場合なのかを検討する。

<研究 2 : 摂食障害の女性はきょうだいと比べて経験の差をどのように認知しているのか?>

摂食障害の発症に関しては、遺伝的なリスクと環境的なリスクがあるが、行動遺伝学的観点から環境を「共有環境」(家族を類似させる効果を持つ環境)と「非共有環境」(一人一人に独自に働き、家族を似なくさせる効果を持つ環境)とに分けた場合、われわれの個人差には「非共有環境」からの影響が大きいことが知られている。Sibling Inventory of Differential Experience (SIDE) (Daniels & Plomin, 1985) は、ある経験をきょうだいと比較させることによって、非共有環境要因を推定できる可能性を持つ質問紙である。この質問紙を用いて、摂食障害の女性はきょうだいと比較して自分の経験をどのように捉えているのかを検討する。

<研究 3 : 摂食障害女性の対人不信に関する検討>

神経性無食欲症の女性の対人不信にきょうだいとの関係やパーソナリティがどのように影響を与えているのかについて検討する。

<研究 4 : 女子中学生の対人関係と食行動の問題に関する検討>

摂食障害を早期に予防・介入する方法の構築のため、女子中学生の体重や体型へのこだわりと対人関係の問題について、対人関係に関する自己評価の低さが、対人関係の問題に影響を与え、この問題を解決する手段として、容姿や体重や体型へのこだわりをコントロールしようとするという仮説の検証を行う。

3. 研究の方法

<研究 1 > 神経性無食欲症の女性 (AN) 50 名 (平均年齢=25.84 歳, range 15~45 歳) と対照群の女性 53 名 (平均年齢=25.44 歳, range 15~43 歳) が分析の対象となった。食行動および態度に関しては Garner et al (1983) が開発した Eating Disorder Inventory (EDI) を、パーソナリティ特性は Cloninger et al (1993) による Temperament and Character Inventory (TCI) を使用して測定を行った。

<研究 2 > AN 女性 42 名 (平均年齢=26.29 歳, range 15~45 歳) と対照群の女性 42 名 (平均年齢=26.24 歳, range 16~43 歳)

が分析対象となった。Sibling Inventory of Differential Experience (SIDE) (Daniels & Plomin, 1985) を用いて、きょうだい関係、親の養育、仲間関係、ライフイベントに関する 73 項目の質問に対して、それぞれの経験が自分により当てはまるか、きょうだいにより当てはまるか、の観点から評定を求めた。

<研究3> AN 女性 52 名 (平均年齢 = 27.04 歳, range 15~45 歳) と対照群の女性 46 名 (平均年齢 = 26.00 歳, range 16~45 歳) が分析の対象となった。Eating Disorder Inventory (EDI), Sibling Inventory Differential Experience (SIDE), Temperament and Character Inventory (TCI) への回答を求められた。

<研究4> 2008 年 7 月, 11 月の 2 回にわたって, 127 名の中学 1, 2 年生が質問紙調査に参加した。本研究では, 85 名の女子のデータが分析対象となった (平均年齢, Time 1: 13.05 歳, SD=.65, Time 2: 13.41 歳, SD=.64)。Eating Disorder Inventory (EDI) (Garner et al., 1983) の児童・生徒用改訂版, 自己知覚尺度 (Harter, 1985; 1988; 眞榮城ら, 2007) 青年期版から, 「社交性」, 「親友関係評価」, 学校への不適応傾向尺度 (酒井ら, 2002) から「孤立傾向」を使用した。

4. 研究成果

<研究1> 食行動・態度に関しては, 「体型不満」を除く全ての次元で AN 女性と対照群の女性との間に有意差が見られた。パーソナリティについては, AN 女性は「新奇性追求」, 「報酬依存」, 「自己志向」が低く, 「損害回避」が高いことが示され, 高い「損害回避」と低い「自己志向」を持つという AN 女性の特徴は欧米での研究報告と一貫したものであった。次に, 「体型不満」の高さとパーソナリティの関係について, AN 群で体型不満の高い者と, 統制群で体型不満の高い者との間でパーソナリティに違いが見られるか検討を行った。その結果, AN/体型不満高群は, 統制/体型不満高群よりも「損害回避」が高く, 「自己志向」が低いことが示された。

「体型不満」は摂食障害の中核的な特徴であることはよく知られているが, 本研究の結果から, 日本において「体型不満」は摂食障害ではない女性においても高い傾向が見られることが明らかとなった。さらに, 「体型不満」だけが摂食障害のリスク要因になるというよりは, 高い体型不満を持ち, あわせて高い損害回避や低い自己志向性を持つ者にリスクが高まる可能性が示唆された。

<研究2> AN 女性のほうが対照群の女性に比べて, 「母親は自分よりも相手のきょうだいのほうに好意を示しがちだった」, 「自分のほうが父親から責められがちであった」と, 親の養育に差があったと認知し, また, 仲間関係については, 自分よりもきょうだいのほうが「人気がある」, 「社交的」, といった活発なグループに属していたと認知する傾向があることが示され, このような要因が摂食障害における非共有環境要因となっている可能性が示唆された。

<研究3> きょうだい関係の様相をとらえるために, SIDE のきょうだい関係の項目について探索的因子分析を行ったところ, 3 因子が抽出され「きょうだいに対する親和的態度」, 「きょうだいに対する攻撃的態度」, 「きょうだいに対する尊重的態度」と命名された。さらに「対人不信」と相関が見られたパーソナリティ特性およびきょうだいに対する態度をもとに, AN 女性群と対照群の女性とで共分散構造分析によるモデルの検討を行った。対照群の女性については, 「対人不信」の高さに影響を与えていたのは, 報酬依存と協調の低さであることが示され, 対照群の女性では, 対人関係と密接に関わっていると考えられるパーソナリティ特徴のみが直接「対人不信」に影響を及ぼしていたというモデルが構築された。

その一方で AN 女性群では, 暖かな社交的友好関係などによって示される報酬依存の低さが「対人不信」に直接影響を及ぼしていたことは対照群の女性と共通であったが, 「きょうだいに対する親和的態度」の高さが「対人不信」の高さに影響を及ぼしており, 「きょうだいに対する親和的態度」には, 自己志向の低さが影響を及ぼしているというモデルになっていた。AN 女性にとって「きょうだいに対する親和的態度」は自信のなさから来る不適応的な振る舞いの表れであり, このような良いきょうだいであろうとする, “おもねる”振る舞いが, 対人的な信頼感のなさの背後に存在しているということが示唆された。

<研究4> まず, 対人関係の自己評価と, 学校における対人関係上の問題では, 社交性と孤立傾向の間に有意な負の相関が見られ, 親友関係評価と孤立傾向との間に有意な負の相関が見られた。また, 孤立傾向と容姿評価との間には有意な負の相関が見られ, さらに, 容姿評価と体重や体型へのこだわり (Time 1) との間には有意な正の相関が見られ, 体重や体型へのこだわり (Time 1) と体重や体型へのこだわり (Time 2) との間にも有意な正の相関が見られた。

これらの相関関係ならびに, 対人関係と容

姿評価、体重や体型へのこだわりに関する仮説に基づき、因果モデルを構築し、検討を行った。対人関係に関する自己評価の社交性の低さは孤立傾向の高さに影響を及ぼし、孤立傾向の高さは容姿評価の低さに影響を与え、容姿評価の低さは1時点目の体重や体型へのこだわりの高さに影響を与えていた。さらに、このような1時点目における因果関係は、2時点目の体重や体型へのこだわりの高さにも影響を与えていた。本研究の結果から、対人関係上の問題を抱えている女子中学生が、その問題を解決し、他者に認めてもらう手段として、体重や体型をコントロールしようとする傾向があることがうかがえる。女子中学生の体重や体型へのこだわりの背景にある対人関係上の苦手さに注目し、対人的スキルを心理教育の中で与えることが、摂食障害の発症の予防に有効である可能性が示唆されたと言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 前川浩子・宗未来・墨岡卓子・島内智子・大野裕・Kathleen Pike 摂食障害に関連する非共有環境要因の検討：—神経性無食欲症の女性はきょうだいと比較して経験をどのようにとらえているのか？ 金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編, 8, 23-34, 2010 査読無
- ② 前川浩子・宗未来・墨岡卓子・島内智子・大野裕・Kathleen Pike 神経性無食欲症の女性における対人不信に関する研究—きょうだいとの関係およびパーソナリティの視点から 金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編, 9, 63-70, 2011 査読無

[学会発表] (計4件)

- ① Hiroko Maekawa, Mirai So, Takako Sumioka, Tomoko Shimanouchi, Yutaka Ono, Kathleen Pike. Personality factors that differentiate women with anorexia nervosa from women with high body dissatisfaction but no eating disorder in Japan. International Conference on Eating Disorders, 2007, Baltimore, Maryland, USA.
- ② Hiroko Maekawa Personality factors that differentiate women with anorexia nervosa from women with high body dissatisfaction but no eating disorder

in Japan. 13th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting, 2008, Tokyo, Japan.

- ③ Hiroko Maekawa, Mirai So, Takako Sumioka, Tomoko Shimanouchi, Yutaka Ono, Kathleen Pike. Patterns of sibling interactions, personality, and interpersonal distrust in women with Anorexia nervosa. International Conference on Eating Disorders, 2010, Salzburg, Austria.
- ④ 前川 浩子・眞榮城 和美 女子中学生の体重や体型へのこだわりと対人関係に関する研究, 日本パーソナリティ心理学会 第19回大会, 2010年, 慶應義塾大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前川 浩子 (MAEKAWA HIROKO)
金沢学院大学・文学部・講師
研究者番号：10434474